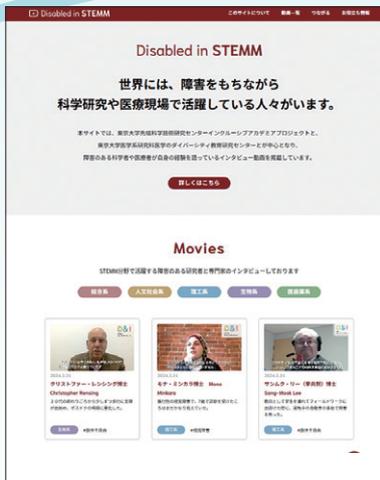


障害のある科学者や医療者の語りのデータベース「Disabled in STEMM」のご紹介



昨年末にメーリングリストでもご紹介しましたが、東京大学先端科学技術研究センターインクルーシブアカデミアプロジェクトと、東京大学医学系研究科医学のダイバーシティ教育センターとが中心となって構築した、障害のある科学者や医療者の体験談を紹介するサイト「Disabled in STEMM」が公開されています。



さらに肢体不自由・内部障害・ADHDの進化生物学者、脳性麻痺の神経内分泌学者、吃音・聴覚障害の心血管科学者、ADHDの言語学者のインタビューの公開が予定されています。障害の種類だけでなく、年齢も専門も国籍も現在働いている国もばらばらです。英語を母国語としない人もいますが、インタビューはすべて英語で行われました。ウェブサイトの動画には日本語字幕が付けられています。



STEMMとは科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、数学(Mathematics)、医療(Medicine)の領域を指す言葉で、一般的に人文社会科学系に比べて障害者にとってハードルが高い領域と言われています。しかし、本当に障害のある人がこうした理工学系領域でキャリアを築くのは難しいのでしょうか。海外に目を向けてみると、障害をもちながら第一線で活躍している研究者や専門家が勢おられます。

Disabled in STEMM (<https://d-stemm.jp/>)は、障害をもちながらSTEMM領域で活躍する人たちが、これまで大学や職場に自分たちの才能を発揮できるようにどんな合理的配慮を求めて、学び働いてきたかについて語っているウェブサイトです。「障害学生の語り」に「理工系領域の人々の語り」を追加した際に、インクルーシブアカデミアプロジェクトの熊谷晋一郎先生と協働させていただいたご縁で、こちらのサイトの海外の研究者へのインタビューと映像制作をDIPEX-Japanが担当させていただきました。

2024年4月15日現在、7名の語りが公開されていますが、さらに4名追加される予定です。現在公開されているのは、以下の方々です。

語り手の多くは子どものころから科学が大好きだったのですが、科学者への道を目指すのに多くのハードルを乗り越えなければなりません。「君には無理だろう」と決めつける教師や「事故があっただけじゃないから」といって本人がやれると思っている研究や授業をやらせてくれない大学や、さらには障害があるから他の人より劣っているという考え方を内面化してしまっていた自分自身が、科学者への道の障害物になっていた、と語っています。

彼らに共通することは、「障害」を自分の側の「欠損」ととらえていないことです。障害があるからこそ、障害のない人にはできない研究ができる、と考えているのです。例えば全盲のヒーラットさんは巻貝の内側を長い探針を使って「観察」します。そのおかげで目が見える研究者が見落とした内部のひだひだを発見することができたと言います。自らを発達障害ではなく「神経学的マイノリティ」と呼ぶサラさんは、経費の精算ができず、論文も査読期間中に別のものに関心が移って完成できなくなったりするのですが、人と異なる情報処理特性のおかげで創造的な仕事できています。

一人ひとり本当に「目からうろこ」のお話ばかりで、障害のある人たちの締め出すことは明らかに科学技術の発展を妨げると感じられると思います。今、ご紹介できているのは海外の研究者の方が中心ですが、国内でSTEMM領域の方々もこれから公開していく予定とのこと。ぜひ一度覗いてみてください。(佐藤(佐久間)りか)

氏名	所属	専門	障害の種類
リチャード・マンキン博士	米国農務省農業研究局	昆虫学	肢体不自由
ブラッドリー・デュアストック博士	パデュー大学教授	リハビリテーション工学	脊髄損傷
ヒーラット・ヴァーメイ博士	カリフォルニア大学デイヴィス校教授	海洋生態学・古生態学	視覚障害
サラ・ランキン博士	インペリアル・カレッジ・ロンドン教授	幹細胞生物学	発達障害
サンムク・リー博士	ソウル大学教授	海洋地質学	脊髄損傷
モナ・ミンカラ博士	ノースウェスタン大学 助教	計算化学	視覚障害
クリストファー・レンシング博士	福建農林大学特別教授	環境微生物学	肢体不自由